

保小連携に関する一考察：道徳教育の視点から

| | |
|-----|--|
| 著者 | 杉浦 勉，河越 |
| 雑誌名 | 北翔大学教育文化学部研究紀要 = Bulletin of Hokusyo University School of Education and Culture Department |
| 号 | 6 |
| ページ | 75-84 |
| 発行年 | 2021 |
| URL | http://doi.org/10.24794/00003332 |

保小連携に関する一考察

—道徳教育の視点から—

A Study of Collaboration Between Nursery Schools and Elementary Schools

—From the Perspective of Moral Education—

杉 浦 勉 河 越 静 香^{*1}
SUGIURA Tsutomu KAWAKOSHI Shizuka

概 要

小学校学習指導要領が2020年度4月より全面実施となった。改訂の基本方針として、「社会に開かれた教育課程」があげられ、「カリキュラム・マネジメント」等を通じた「教育の質の向上」が求められた。その中で、教育課程の編成に関しては、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続が重要視されている事項の1つと言える。従来、幼小連携に関する研究や先行実践に関しては、幼稚園と小学校の連携が多く見られる一方、保育所と小学校の連携については十分であるとは言えない現状ではないだろうか。

本稿の目的は、「保幼小連携」の中でも、とりわけ保小連携に着目し、保育所における幼児期の教育と小学校における児童期の教育の円滑な接続の在り方について考察することである。具体的には、A保育所の取組を事例に、小学校の道徳教育の視点から、保小の円滑な接続の在り方を探る。

結果は、以下の通りである。

- ・保育所の特色ある保育を入学当初の教育課程に位置付けることで、スタートカリキュラムの充実化を図ることに一定の効果が期待できる一方、今後さらなる実践検証が必要である。
- ・保育所の子どもたちが同じ小学校に入学しない場合や、異なった保育園、幼稚園や認定こども園など複数から入学する場合におけるスタートカリキュラムの在り方については、さらなる研究の必要がある。
- ・保育士等と小学校教師との連携に関して、子どもの成長の姿の共有化だけでなく、指導の在り方や工夫についても、協議や検討する研修の場があることで、さらなる指導の効果が期待できると考える。

キーワード：特色ある保育 スタートカリキュラム

*1 苫小牧市立いとい北保育園園長

I 研究の目的

2017（平成29）年3月31日に公示された小学校学習指導要領が、2020年（令和2年）4月1日より全面実施となった。今回の改訂の基本的な考え方は、「社会に開かれた教育課程」、平成20年改訂の教育内容を維持した上での知識の理解の質の向上による確かな学力の育成、道德教育の充実などによる豊かな心や健やかな体の育成である。具体的な方針としては、育成を目指す資質・能力の明確化が図られ、「三つの柱」、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善、カリキュラム・マネジメント、教育内容の主な改善事項を通して、「教育の質の向上」を図ることが求められた。その中でも、教育課程の編成に至っては、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続も重要視されている事項の一つである。小学校教育と同様に、幼児期の教育については、幼稚園や認定こども園、保育所が、「三つの柱」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとして、小学校と子供の成長について共有化を図り、幼児期から児童期への発達の流れを円滑に行うようにすることが求められている。ここで留意すべき点は、「保育所保育指針解説」（2017）で指摘されているように、小学校教育の先取りをすることではない¹⁾ということである。また、保育所保育で求められていることについて、「子どもが遊び、生活が充実し、発展することを援助していくことであり、就学前までの幼児期にふさわしい保育を行うことが最も肝心である」²⁾とも指摘している。これは、幼稚園教育要領解説や幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説にも同様に指摘されているものである。さらに、子どもの発達や学びの連続性を確保するために、保育参観や授業参観等を通して、保育士等と小学校教師との意見交換や合同の研究の機会等を設定することも求められている。一方、小学校教育においては、上述した取組に加え、小学校入学当初における生活科を中心とした「スタートカリキュラム」の充実が求められている³⁾。

そこで、本稿では、子どもの発達や学びの連続性を確保する「保幼小連携」をテーマとして取り上げ、その中でもとりわけ保小連携に着目し、保育所における幼児期の教育と小学校における児童期の教育の円滑な接続の在り方について考察することを目的とする。具体的には、A保育所の取組事例を基に、小学校入学当初のスタートカリキュラムの充実化を目指した教育課程を提案することで、保小の円滑な接続の在り方を探りたいと考える。また、小学校教育においては、道德教育の視点を基に、スタートカリキュラムの充実化について論じていくこととする。

II A 保育所の取組

1 A 保育所の概要

A 保育所は、人口15万人を越える都市にある市立の保育所である。学級数は6クラスあり、園児数は102名（令和2年1月1日現在）である。公営団地群の中に位置しているが、隣接す

る公園も多くあり、自然との触れ合いを取り入れた保育を行うことができる環境にある。保育方針は、「子どもが元気に育ち、生きる力を身につけることを家庭と一緒に目指していく」とことと「様々な経験を通し、自分に自信を持ち表現する力を身につけ、他人を思いやる心が育つように関わっていく」ことである。A 保育所の特色ある保育の1つとして、「和太鼓」がある。

2 A 保育所の和太鼓の取組

A 保育所の和太鼓の取組は、特別保育事業の郷土文化伝承活動として位置付いている。和太鼓の取組の概要を以下の表1に示す。

表1 A 保育所の和太鼓の取組に関する概要

| 【(1) 目的】 |
|--|
| ①身体でリズムを覚えて楽しく打つ。 ②和太鼓に親しみを持って触れることにより、和太鼓への興味、関心を深める。 ③地域や園の行事で発表することで、保育園を知ってもらう。 ④太鼓打ちやリズム打ちが楽しくできるようにする。(低年齢から少しずつ太鼓に親しむ) |
| 【(2) 年齢ごとの目標】 |
| ○0・1・2歳：太鼓の音色に親しむ。 ○3歳：和太鼓の音色に親しみをもち、一定のリズム打ちが楽しめるようになる。 ○4歳：リズムや曲に合わせて楽しく和太鼓に取り組みながら、みんなで合わせる楽しさを知る。 ○5歳：みんなでひとつの目標に向かって団結し、全員でそろえて打つことの気持ちよさや音の良さ、迫力を感じ自信を持って発表する。 |
| 【(3) 過去に取り組まれた実践例】 |
| ①0, 1歳児 ・段ボールで太鼓を作り、ラップの芯をバチに見立て、自由に打つことを楽しんでいた。 ・日々の中で、保育士がリズムを口づさみながら、子どもたちと一緒に手や指でリズムを打って遊んでいた。 ・幼児棟で子どもたちが太鼓を打っている時に、聴きに來ていた。 ②2, 3歳児 ・空き缶で太鼓を作り、打っていた。 ・発表会で「きらきらぼし」の曲に合わせて、太鼓の発表をした。 ・音楽に合わせて、簡単なリズムを太鼓で打つことを楽しみ、発表会でも披露した。 ③4歳児 ・年長児の練習する姿をお手本として、一緒にリズムをとったり、踊ったりしていた。 ・発表会で自分たちも発表することを楽しみに取り組んでいた。 ・発表会を経験したことで自信を持ち、次年度への意欲と期待を高めていた。 ④5歳児 ・北まつり（地域行事）での発表 ・発表会での披露 ・卒園式での発表 ・老人施設や町内会の方々への発表 |

平成31（令和元）年度の和太鼓の取組に関する計画表を以下の表2に示す。

表2 A 保育所平成31年（令和元）年度和太鼓の取組に関する計画表

| クラス | 【1期（4月～8月）】 | 【2期（9月～11月）】 | 【3期（12月～3月）】 |
|-----|--|---|---|
| 0歳児 | <ul style="list-style-type: none"> 和太鼓の発表を見たり触れたりする機会を、月に2回設定し、興味・関心を持てるようにする。 | <ul style="list-style-type: none"> 手作り太鼓などで自由に打つ機会を月に2回設定し、親しむ。 | <ul style="list-style-type: none"> 曲に合わせて打つことを楽しむ機会を月に1回設定し、親しむ。 |
| 1歳児 | <ul style="list-style-type: none"> 保育士や年上のクラスの演奏を聞く。 手作り太鼓等に触れる機会を月に2回設定する。 | <ul style="list-style-type: none"> 遊びの中で簡単な曲に合わせて、手作り太鼓等を自由に打つことを楽しむ。 月に1回和太鼓に触れる機会を設定する。 | <ul style="list-style-type: none"> 月に1回曲に合わせて和太鼓を打つ場を作る。 年長児などの太鼓演奏を聞く。 |
| 2歳児 | <ul style="list-style-type: none"> 保育士が演奏する和太鼓の音を聞く。 5月から毎月2回和太鼓に触れる。 | <ul style="list-style-type: none"> 1期から継続して毎月2回和太鼓に触れる。 知っている曲に合わせて簡単なリズム打ちをみんなで行う。 | <ul style="list-style-type: none"> 1期2期同様に継続して和太鼓に触れる。 様々なリズム打ちを楽しみ、新しい曲に合わせて演奏することを楽しむ。 |
| 3歳児 | <ul style="list-style-type: none"> 週に1回曲に合わせてリズム打ちができるようにする。 パチの持ち方、姿勢について知る。 月に1回馴染みのある曲に合わせて太鼓でリズム打ちを楽しむ。 | <ul style="list-style-type: none"> 曲に合わせて様々なリズム打ちをすることや、発表会で発表することを楽しむ。 | <ul style="list-style-type: none"> 和太鼓に触れることに慣れ、意欲的に取り組み、楽しんで発表する。 |
| 4歳児 | <ul style="list-style-type: none"> 月に1回程度曲に合わせて太鼓に親しむ（年間）。 言葉に合わせてリズム打ちをして、様々なリズムがあることを知る。 保育士や年長児の太鼓の発表を聞き、刺激を受け、リズムに合わせて表現しようとする。 | <ul style="list-style-type: none"> 親しみのある曲を、みんなに合わせて発表することを楽しむ。 | <ul style="list-style-type: none"> 他のクラスの発表した曲に合わせて演奏し、太鼓を楽しむ。 |
| 5歳児 | <ul style="list-style-type: none"> 4～6月：月1回程度曲に合わせて太鼓に親しむ。（パチの持ち方、姿勢の確認） 7～8月：北まつりに向けた取組 8月：北まつりでの発表 | <ul style="list-style-type: none"> CDに合わせず、基本のリズム打ちを行う。 | <ul style="list-style-type: none"> 12～1月：発表会で他のクラスが行った曲で親しむ。 2～3月：卒園式に向けた取組 3月：卒園式、いつきの会での発表 |

Ⅲ スタートカリキュラムの充実化を目指した教育課程

1 スタートカリキュラムの基本的な考え方

文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター（2015）は、スタートカリキュラムの基本的な考え方⁴⁾として以下の4点を示している。

- ①一人一人の子供の成長の姿から編成しよう
- ②子供の発達を踏まえ、時間割や学習活動を工夫しよう
- ③生活科を中心に合科的・関連的な指導の充実を図ろう
- ④安心して自ら学びを広げる学習環境を整えよう

入学時の子どもの発達や学びには個人差があり、主に「三つの柱」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基に、子ども一人一人の実態を把握することの重要性が求められている。幼児期の教育の中で育成された「学びの芽生え」を的確に捉えるために、子ども一人一人の成長の姿の共有はもちろんのこと、5領域を総合的に学ぶ教育課程と各教科等の学習内容を系統的に学ぶ教育課程をいかにつなぐとよいのかということが問題として挙げられる。文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター（2015）では、「生活科を核として楽しいことや好きなことに没頭する中で生じた驚きや発見を大切にし、学ぶ意欲が高まるように活動を構成することが有効」⁵⁾であるとしているように、生活科を中心としてスタートカリキュラムを展開していくことが一般的である。

本研究では、A保育所の特色ある保育を活かしたスタートカリキュラムを提案する。

2 A保育所の特色ある保育を活かしたスタートカリキュラム

A保育所の特色ある保育の1つとして「和太鼓」について前述した。この特色ある保育の「和太鼓」を活かして、入学当初のスタートカリキュラムを構想する。スタートカリキュラムは生活科を中心として展開していく教育活動が一般的であるが、本研究では道德教育の視点を中核に据えたスタートカリキュラムを提案したいと考える。A保育所の「和太鼓」の取組に関する目的（表1）から、道德教育の視点と関係する内容項目を、「C(14)よりよい学校生活、集団生活の充実」と「C(15)伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度」の2つとして押さえる。入学当初において、この「和太鼓」を発表する場合は、学校行事「1年生を迎える会」に設定する。この特別活動の事前の活動として、生活科や音楽科、国語科に加え、道德科の時間も設定する。道德科については、主に「1年生を迎える会」への意欲を高めることを目標として実践する。また、特別活動の事後の活動として、道德科において活動の振り返りを行う。事前の活動、事中の活動、事後の活動を次に示す。なお、事中の活動は学校行事「1年生を迎える会」であり、本稿では省略させていただく。

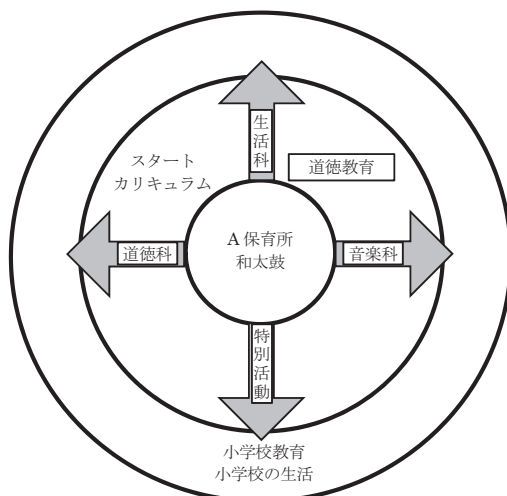


図1 A 保育所の特色ある保育を活かしたスタートカリキュラムのイメージ図

3 事前の活動「道徳科」

(1) 主題名・教材名・内容項目・ねらい

- ・主 題 名：「がっこうたのしみだ」
- ・内容項目：「C-(14)よりよい学校生活，集団生活の充実」
- ・教 材 名：「たのしい がっこう」⁶⁾
- ・授業の目標：保育所で学んだことを振り返ったり，小学校の生活で楽しみにしていることについて考えたりすることで，これからの学校生活への期待を膨らませ，学校の生活を楽しもうとする態度を養う。

(2) 関連・連携構想

①事前：事前調査アンケート（保育士）

事前調査として，保育所での取組について聞き取り調査を行い，活動の様子を想起しやすくするために，写真等を準備する。

②事中：道徳科 本時「がっこうたのしみだ」

保育所での取組を振り返ったり，読み物教材の挿絵から学校生活で楽しみなことを考えたりする。1年生を迎える会での発表に意欲を高める。

③事後：学校行事「1年生を迎える会」へ向けて

音楽科などの学習時間や休み時間を活用し，1年生を迎える会の発表練習に取り組む。

(3) 本時の展開について

本時の展開について、以下の表3に示す。

表3 事前の活動としての道徳科の本時の展開

| | 教師の働きかけ（主な発問） | 予想される子どもの心の動き | 留意点と評価 |
|----|---|--|--|
| 導入 | <p>○保育所での活動を振り返らせる。</p> <p>○本時の学習テーマを提示する</p> | <p>○保育所での活動を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・先生といっぱい遊んだ。 ・友達とお絵描きした。 ・おやつがおいしかった。 <p>○本時の学習テーマを把握する。</p> | <p>○写真を提示し、想起しやすくさせる。</p> |
| | <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> がっこうでたのしいことをさがそう。 </div> | | |
| 展開 | <p>○教材「たのしい がっこう」を提示する。 「学校では、どんなことをやと思いますか？」</p> <p>○挿絵にある子どもたちが笑顔である理由を考えさせる。 「みんなにこにこしているけれど、それはどうしてだろう？」</p> <p>○保育所での取組と比較して考えさせる。 「保育所の時のみなさんの様子と比べてみるとどうでしょう？」</p> | <p>○教材「たのしい がっこう」の挿絵を見る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お勉強をする。 ・字を書く。 ・教科書を読む。 ・給食を食べる。 ・プールをする。 ・ボールで遊ぶ。 ・縄跳びで遊ぶ。 <p>○挿絵にある子どもたちが笑顔である理由を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽しいからだ。 ・みんなでお勉強するのが楽しいんだ。 ・みんなで給食を食べるのも楽しいんだ。 <p>○保育所での取組と比較して考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・同じだ。 ・わたしたちもにこにこしている。 | <p>○挿絵を黒板に掲示する。</p> <p>○保育所での写真に注目させる。</p> <p>○保育所の時と同じように楽しく生活することができるという期待感を高める。</p> |
| 終末 | <p>○1年生を迎える会について知らせる。 「1年生を迎える会でどんな発表をしよう」</p> <p>○本時の学習を振り返らせる。</p> | <p>○1年生を迎える会の発表について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・和太鼓を発表したい。 ・お兄さんやお姉さんに、和太鼓を聞いてもらいたい。 ・和太鼓を聞いて、喜んでほしい。 <p>○本時の学習を振り返る。</p> | <p>○保育所で特に頑張っていたことや自信をもってできることを確認する。</p> <p>○本時の学習テーマに合わせて、達成することができたかどうかを挙手させる。</p> |

（４）指導の留意点

指導の留意点として最も重要なことは、今後の学校生活に期待感や楽しみをもたせることである。従来の道徳科の学習では、今後の学校生活をイメージさせる学習活動を取り入れることが一般的であると考え。その学習活動に改善を加え、これまでの保育所での学びを活かした学習や生活をするができるということを子どもたちに気付かせる学習活動を設定する。その中でも特に、自信をもって取り組んできた活動であり、その活動が多くの人に喜ばれたものであるという教育活動をスタートカリキュラムとして位置付けることで、さらなる効果が期待できると考える。入学当初の１年生の子どもたちにとって、環境の変化に対応するだけでなく、新たなことを数多く取り組むという負担は非常に大きいと考える。そういった負担感や大変さを少しでも取り除くために、自分のよさや自信のあることに取り組む場面を取り入れる価値は大きいと考える。

また、終末場面において、和太鼓の取組を想起させる場面については、道徳教育の視点として、地域の方や保護者など様々な人々に喜んでもらった経験や、みんなで１つのことに取り組む達成感や充実感についても、子どもたちなりの言葉で表現することができるように配慮したり、気付かせたりするよう指導を工夫する必要がある。

さらに、本時の学習が終わった後に、和太鼓の練習に取り組むことができるように、準備や環境づくりに工夫を図る。子ども自身が自信をもって取り組むことができる活動を取り入れることで、学校生活への不安感を解消するとともに、これまでの取組のイメージを見通しとしてもち、学校生活への意欲を高めることができると考える。

４ 事後の活動「道徳科」

（１）主題名・教材名・内容項目・ねらい

- ・主 題 名：「がっこうたのしみだ」
- ・内容項目：「C-(14)よりよい学校生活，集団生活の充実」
- ・教 材 名：「たのしい がっこう」⁷⁾
- ・授業の目標：学校行事「１年生を迎える会」の発表を振り返り，これからの学校生活への期待を膨らませ，自信を持って学校の生活を楽しもうとする態度を養う。

（２）関連・連携構想

①事前：学校行事「１年生を迎える会」・発表の練習

授業時間や時間割を弾力的に編成し，入学当初に必要な学校生活に関する基礎的な内容を行いながら，発表の練習に取り組ませる。

②事中：道徳科 本時「がっこうたのしみだ」

学校行事「１年生を迎える会」を振り返り，上級生や先生方の感想を聞くことで，学校生活への意欲を高める。

③事後：学級通信等で取組を紹介する。

保護者や保育所の先生方に子どもたちの様子や頑張り，活躍について，学級通信等で伝え，子どもたちへの賞賛や励ましの言葉をお願いする。

活動の様子が分かる写真等を教室に掲示し，今後の学校生活への意欲を高める。

（３）本時の展開について

本時の展開について，以下の表４に示す。

表４ 事後の活動としての道徳科の本時の展開

| | 教師の働きかけ(主な発問) | 予想される子どもの心の動き | 留意点と評価 |
|----|--|---|--|
| 導入 | ○学校行事「１年生を迎える会」を想起させる。 ○本時の学習テーマを提示する | ○学校行事「１年生を迎える会」を想起する。 ○本時の学習テーマを把握する。 | ○写真や動画を提示し，想起しやすくさせる。 |
| | 1 年生を迎える会を振り返ろう。 | | |
| 展開 | ○教材「たのしい がっこう」を提示し，挿絵にある「１年生を迎える会」の様子と自分たちの様子を比較させる。「１年生を迎える会での皆さんの様子はどうだったでしょう？」 ○上級生や先生方の感想を知らせる。 | ○教材「たのしい がっこう」の挿絵を見る。 ・少し緊張した。 ・うまくできた。 ・楽しかった。 ○上級生や先生方の感想を聞く。 ・ほめてくれてとてもうれしい。 ・喜んでもらえてよかった。 ・またやりたい。 | ○挿絵を黒板に掲示する。 ○動画を提示したり，手紙を読んだりする。 |
| 終末 | ○本時の学習を振り返らせる。 | ○本時の学習を振り返り，これからの学校生活に意欲を高める。 | ○教材「たのしい がっこう」の挿絵にある様々な学校生活の様子に着目させ，本時の振り返りを行う。 |

Ⅳ まとめ

本稿は，子どもの発達や学びの連続性を確保する「保幼小連携」をテーマとして取り上げ，その中でもとりわけ保小連携に着目し，保育所における幼児期の教育と小学校における児童期の教育の円滑な接続の在り方について考察することを目的として研究を進めた。

A 保育所の取組事例を基に，小学校入学当初のスタートカリキュラムの充実化を目指した教育課程を構想し，道徳教育の視点を取り入れた教育活動の設定により，保小の円滑な接続の在り方を考察することができたと考える。

一方で、保小の円滑な接続の在り方に関して以下のような課題も残った。

まず、保育所の特色ある保育を入学当初の教育課程に位置付けることで、スタートカリキュラムの充実化を図ることに一定の効果が期待できると考えるが、今後は実践検証を行い、その有効性を研究する必要がある。また、本研究では、保育所の子どもたちが同じ小学校に入学することを想定したものであったが、保育所の子どもたちが同じ小学校に入学しない場合や、異なった保育園、幼稚園や認定こども園など複数から入学する場合もあるため、様々なケースに対応したスタートカリキュラムの在り方についても、さらなる研究の必要があると考える。さらに、保育士等と小学校教師との連携に関して、子どもの成長の姿の共有化だけでなく、指導の在り方や工夫についても、協議や検討する研修の場があることで、さらなる指導の効果が期待できると考える。

入学当初の1年生の子どもたちにとって、環境の変化に対応するだけでなく、新たなことを数多く取り組むという負担は非常に大きいと考える。いわゆる「小1プロブレム」といった教育課題がそれに当たるものであると考える。そういった負担感や大変さを少しでも取り除くために、スタートカリキュラムの充実化はもちろんのこと、自分のよさや自信のあることに取り組む場面を取り入れる価値は大きいと考える。子どもが主体的に自己を発揮し、学びに向かうことができるよう、子どもの発達と学びの連続性を確保するという視点で、小学校の教育課程の編成や実施といったカリキュラム・マネジメントの重要性についてもさらなる研究の余地があると考えられる。

V 引用文献

- 1) 厚生労働省 (2017)「保育所保育指針解説」 pp.296-298
- 2) 厚生労働省 (2017) 前掲書 pp.296-298
- 3) 文部科学省 (2017)「小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 総則編」 pp.73-74
- 4) 文部科学省国立教育政策研究所 (2015)「スタートカリキュラム スタートブック」 pp.8-9
https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/startcurriculum_mini.pdf?time=1423123582117
- 5) 文部科学省国立教育政策研究所 (2015) 前掲書 pp.4-5
https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/startcurriculum_mini.pdf?time=1423123582117
- 6) 日本文教出版 (2017)「しょうがくどうとく いきるちから1」 pp.6-7
- 7) 日本文教出版 (2017)「しょうがくどうとく いきるちから1」 pp.6-7